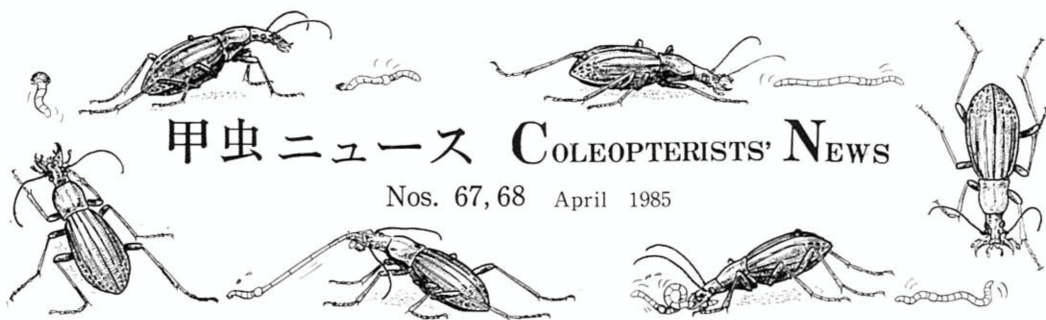




甲虫ニュース COLEOPTERISTS' NEWS

Nos. 67, 68 April 1985

日本産フタホシサビカミキリ *Ropica* 属*

——日本産カミキリムシ科の研究 (4)——

楨 原 寛

フタホシサビカミキリ *Ropica* 属は、草間他 (1984) によれば日本には下記の 6 種 (うち 1 種は台湾に原産種、日本に 3 亜種) が分布している。

Ropica formosana japonica HAYASHI ウスフタモンサビカミキリ 屋久島亜種：屋久島。

R. formosana tokara TAKAKUWA ウスフタモンサビカミキリ トカラ亜種：トカラ中之島。

R. formosana nobuoi BREUNING et OHBAYASHI ウスフタモンサビカミキリ 奄美亜種：奄美大島、喜界島、徳之島。

R. honesta PASCOE フタホシサビカミキリ：本州、トカラ中之島、奄美大島、喜界島、徳之島、沖縄本島、宮古島、伊良部島、石垣島、西表島、波照間島、与那国島；東洋熱帯、ニューギニア。

R. caenosa (MATSUSHITA) フタモンサビカミキリ：沖縄本島、阿嘉島、宮古島、伊良部島、石垣島、西表島、波照間島、与那国島；台湾。

R. hayashii BREUNING ハヤシサビカミキリ：石垣島、竹富島、西表島、小浜島、与那国島。

R. lochooana (MATSUSHITA) ゴマフサビカミキリ：沖縄本島、宮古島、伊良部島、石垣島、西表島、波照間島、与那国島。

R. tsushimensis HAYASHI ツシマサビカミキリ：対島。

しかし、フタホシサビカミキリ属の種類、特に南西諸島のものは地理的変異、個体変異が著しく、これまで種の識別のために使用されてきた複眼下片とはおの比、触角第 3、4 節の長さは使用できない。筆者はこれまで南西諸島の調査を数多く行ない、多数の標本を入手して、日本産フタホシサビカミキリ属を筆者なりに整理したので、ここにその結果について報告する。

Genus *Ropica* PASCOE

フタホシサビカミキリ属

Ropica PASCOE, 1858. Trans. ent. Soc. Lon-

don (2) 4 : 247.

東洋熱帯を中心にオーストラリア北部から日本まで 120 種以上の種が分布し、小型な種が多く、地味な色で同じような斑紋を持ち同定困難な種が多い。日本産は 3 群にわかれる。

日本産フタホシサビカミキリ属の検索表 (一部台湾産も含む)

1. 上翅の斑紋は中央部に位置し、斜に外側前方に向いている (図 1, A—E) が沖縄本島産には消失するものもある (*nobuoi* 群) 2
——上翅の斑紋は中央部よりやや下方に位置し、側方に向かい水平もしくは斜め外側後方に向くが、外縁部で波曲するものが多い (図 1, F—O) 5
2. 上翅中央の斑紋は非常に明瞭、消失することなく、斑紋の前後縁は直線的であり丸みをおびず、翅端部付近の縦隆起は強く、翅端部はやや反上する 3
——上翅中央の斑紋はあまり明瞭ではなく、前後縁はやや丸みをおびるが、ときとして消失する；翅端部付近の縦隆起はそれほど強くなく、翅端部は反上しない
... *R. caenosa* (MATSUSHITA) フタモンサビカミキリ
3. 上翅は翅端近くで、やや急に狭まり、縦隆起はそれほど強くなく、前胸背側縁はやや丸い 4
——上翅は翅端近くで急に狭まり、縦隆起は非常に強く明瞭 *R. nobuoi tokarana* TAKAKUWA
4. 上翅の白～黄色小斑点は全面に散在する
..... *R. nobuoi nobuoi* BREUNING et OHBAYASHI ウスフタモンサビカミキリ
——上翅の白～黄色小斑点は中央斜帯より先端部にかけて散在する *R. nobuoi japonica* HAYASHI ウスフタモンサビカミキリ 屋久島亜種
5. 上翅の色は様でなく、会合部を中心にして、両側に黄褐色の軟毛による幅広い斑紋を持つ (*honesta* 群) 6

* Hiroshi MAKIHARA, Genus *Ropica* from Japan. — Studies on Cerambycidae (Coleoptera) of Japan (4) —

る限り、琉球や四国産も共に *cephalotes* で、*tosana* はそのシノニムとしなければならない。一方、台湾やベトナムのものには、目下の所、有効な種名は見当らない。

日本や琉球のトサヒラズゲンセイとフィリピンやジャバのヒラズゲンセイを比較してみると、前者の前胸背板の側縁は円味があり、後者のそれはやや直線的で円味が少なく、前胸背板が矩形に近い形をしている。この点で *tosana* と *cephalotes* を区別出来るのではないかと考えたが、ジャバのものはフィリピンのものより多少円味が強く、沖縄のものも四国のものより円味が多少弱い。四国のものは円味が最も強く、たしかに他地方産のものと区別出来るようにも見えるが、台湾のものも似た様な形をしている。これらの点を総合すると、現在私の手許にある標本を比較する限り、前胸背板の形は変化が多く、多少の地方的傾向はあるが、種を分ける決め手とはなり得ないのではないと思われる。従って、現時点では、四国産も沖縄産もフィリピン産と同一種と考えられ、区別する必要はない。また、フィリピン産はジャバ産と同一種と考えられるから、日本産の種類には、一応ジャバから記載された *Cissites cephalotes* (OLIVIER, 1795) を当て、*Horia tosana* KÔNO, 1936 と *Cissites sasakii* KÔNO, 1936 は共にそのシノニムと見做してよいであろう。和名もヒラズゲンセイとした方がよいであろう。

クマバチ類はかなり太い木材に穿孔し営巣するので、海流によって分布が拡大することも当然考えられ、その様な例も報告されている。また、甲虫類の中には、フィリピンから琉球列島や日本の太平洋岸にかけて海流によって分布を拡大したと考えられる例も多く、ヒラズゲンセイもその典型と考えてよいであろう。ただし、この場合は他の多くの食材性の昆虫の例とは異っていて、フィリピンでヒラズゲン

セイが寄主としているクマバチと琉球列島や日本でヒラズゲンセイが寄主としているクマバチとは系統的にかなり異った種類であって、日本では勿論、クマバチ *Xylocopa* (*Alloxycopa*) *appendiculata circumvolans* SMITH に寄生し、沖縄本島ではオキナワクマバチ *X. (A.) flavifrons* MATSUMURA、石垣島ではアカアシセジロクマバチ *X. (A.) albino-tum* MATSUMURA に寄生するものと推定されるが、フィリピンでは、少なくともミンダナオ島では必ず色彩の異なる、日本のものとは別亜属に属する種類に寄生する。同じクマバチとは云え、日本や琉球のクマバチとは亜属も異なるかなり異質の種類であるが、種名はまだ解らないままである。フィリピンから流れ着いた木材から発生したヒラズゲンセイが、亜属を異にする程、系統的に異ったクマバチに円滑に寄主を転換出来たかどうか、問題は残るが、現時点ではその機構は未知のままで確かめられていない。

以上を整理すると、ヒラズゲンセイの学名は以下の様になる。

- Cissites cephalotes* (OLIVIER, 1795) ヒラズゲンセイ
Horia cephalotes OLIVIER, 1795, Ent., 3 : 5, pl. 1. fig. 3.
Horia maxillosa FABRICIUS, 1801, Syst. El., 2 : 86.
Cissites cephalotes : CASTELNAU, 1840, Hist. nat. Ins., 2 : 279.
Cissites (*Synhoria*) *cephalotes* : GAHAN, 1908, Ann. Mag. nat. Hist., (8), 2 : 204.
Horia tosana KÔNO, 1936, Ins. Mats., 10 : 96, fig. 4.
Cissites (*Synhoria*) *sasakii* KÔNO, 1936, Ins. Mats., 10 : 97, fig. 5.

(国立科学博物館動物研究部)

〇オオキバナガミズギワゴミムシの新産地 (ミズギワゴミムシ分布資料 7)

オオキバナガミズギワゴミムシ *Armatocillenus sumaoi* (MORITA) は従来、北海道と千葉県から知られていたが、筆者は下記のように東北地方で採集しているので報告しておきたい。

2 頭、宮城県阿武隈川河口, 23. v. 1975; 1 頭、福島県鮫川河口, 28. iv. 1978; 17 頭, 30. v. 1980, 以上筆者採集。(東京都港区, 森田誠司)

〇キボシアトキリゴミムシの都内からの記録

キボシアトキリゴミムシ *Anomotarus stigmula* CHAUDOIR は国内では本州、四国、九州、琉球に分布し海外では台湾、ニューカレドニア、セレベス、ジャバ、セイロン、インドと熱帯アジアにその分布の中心をもつ種の様で本州では非常に稀なアトキリゴミムシである。関東からは筆者の知るかぎりでは埼玉県と群馬県からしか採集されていない様である。今回下記の場合において採集できたので報告す

る。なお本種は肩部の黄褐色縦紋と会合部翅端の黄褐色ハート状紋によって同定は容易である。

1 頭、東京都大田区池上本門寺, 31. xii. 1984, 和泉敦夫採集。

落葉下の土を採取してストーブ上で加熱する方法で採集した。末筆ながら本種を確認下さり関東地方の既知産地をお教え下さった笠原須磨生氏に深く感謝する。(東京都大田区, 和泉敦夫)

〇クロツブマグソコガネを 11 月に採集

クロツブマグソコガネ *Aphodius yamato* NAKANE は、関東の丹沢山塊では 4 月上旬から 7 月上・中旬まで成虫が出現していることが判っている。しかし、昨年 (1984) 11 月 25 日に東丹沢の札掛で糞虫類を採集した際、若干のツヤチャグロマグソコガネの中に唯 1 頭、本種が混じっていた。後藤光男氏 (1969) も偶発として 10 月のデータを紹介しているが、同様の例として報告しておく。

(神奈川県座間市, 西川正明)

日本初記録の *Psyllobora* 属のテントウムシ

窪木幹夫*・和泉敦夫**

Psyllobora vigintimaculata SAY クモガタテントウ (新称) は北アメリカに広く分布するカビクイテントウ族の1種である。筆者らは東京都大田区内で多数の成虫を採集したので報告する(図1)。

8頭, 東京都大田区大井埠頭埋立地, 24. vi. 1984, 和泉敦夫採集; 68頭, 同埋立地, 28. vi. 1984, 窪木幹夫採集; 4頭, 同埋立地, 28. vi. 1984, 和泉採集; 9頭, 同埋立地, 30. vi. 1984, 和泉採集; 48頭, 同埋立地, 1. vii. 1984, 和泉採集; 6頭, 同埋立地, 31. x. 1984, 窪木採集; 28頭, 大田区西六郷四丁目(多摩川の河原), 1. xi. 1984, 窪木採集。

体長2.0~2.7 mm。黄褐色, 前胸背・上翅斑紋は淡褐色~黒褐色。前胸背に5個, 上翅に10対の斑紋を持つが, 個体により結合したり消失したりする。小楯板は黒色。後胸部・腹部は黒色, 腹部周縁は褐色。肢は黄褐色。図2に大井埠頭埋立地から採集した個体の上翅斑紋の変異を示した。

本種は植物の葉に寄生して白渋病やすす病をおこさせるカビ類(子のう菌)を食べる食菌性のテントウムシである。大井埠頭埋立地

や多摩川の河原ではセイタカアワダチソウに寄生した白渋病菌を食餌としていた。6月28日の調査では幅2m, 長さ40mの連続したセイタカアワダチソウの群落で2時間のスウィーピングを行なって, 合計68頭の成虫を採集した。

大井埠頭は外国船が頻繁に出入りする日本有数の輸入基地の一つである。クモガタテントウはこの外国船によって北アメリカから移入されたものと思われる。日本にはキロテントウ, シロジウロクホシテントウ, シロホシテントウな

などの白渋病菌を食べる食菌性のテントウムシが普通に生息している。それゆえ, 同じ食性を持つクモガタテントウにとって日本での食餌の問題はないと考えられる。北アメリカではカナダにも分布しているので日本での越冬も可能であろう。今後, 本種が日本に土着するのか, さらに土着後分布域を広げていくのか追跡調査をする必要がある。

末筆ながら, 同定の労をとられ, 種々ご教示いただいた福井大学教育学部の佐々治寛之教授に厚くお礼申しあげる。



図1. セイタカアワダチソウの葉裏の白渋病菌を食べるクモガタテントウ

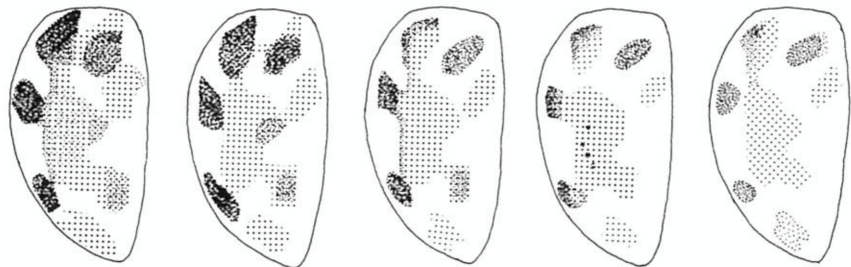


図2. クモガタテントウの上翅斑紋の変異

(*東京都世田谷区, **東京都大田区)

〇コホネゴミムシダマシの採集例

コホネゴミムシダマシ *Phaleromela subhumeralis* MARSEUL は, わが国では, 北海道および本州北端部の海浜地域に生息する甲虫であるが, 筆者は1983年9月, 北海道各地で本種を採集したので, その採集状況を列挙して本種の生態の一報告としたい。なお, 当然のことながら採集地はすべて海浜であり, それぞれ記録したものの直下か, 下の砂の中より採集したものである。

小樽市塩谷, 5, ix, 石一多数, ウニの死骸一3頭, 小樽市銭函, 5, ix, 鰯パンくず一3頭, 西瓜くず一2頭, 死後間もない水鳥死骸一2頭, 腐敗の

進んだ犬の死骸一3頭, 石一2頭; 苫小牧市勇払, 6, ix, 海藻クズ一2頭; 伊達市西浜町, 7, ix,

昆布一1頭。図鑑など多くの解説書では単に「海浜性」とだけ記されていることが多いが実にさまざまな所から発見されるものである。

尚, 北海道からは既に記録されている種類ばかりであるが, 同時に次のゴミムシダマシ類も採集出来たので併せて記録しておく。ホソハマベゴミムシダマシ勇払, 10頭; ホネゴミムシダマシ塩谷, 17頭; ハマヒョウタンゴミムシダマシ勇払, 1頭; カクスナゴミムシダマシ勇払, 1頭; 西浜町, 19頭; スナゴミムシダマシ西浜町, 1頭。(神奈川県川崎市, 沢田和宏)

○クチクシヒゲムシの一知見

クチクシヒゲムシ *Sandalus segnis* LEWIS は、一風変わった形をした比較的大型の甲虫として知られているが、割合採集しにくいもののようなのである。筆者は 1984 年 6 月に福島県原ノ町市外で多数の本種を目撃、採集しているので報告する。

約 15 頭、福島県原ノ町市赤根林道, 2. vi. 1984, 露木繁雄採集。

当日は晴天で、林道終点の伐採地跡に「保残木」と書かれて、およそ 10 m 間隔で切り残された直径 50~60 cm のケヤキ、ブナの生木があり、その幹に止っていた。目の高さぐらいから 7~8 m ぐらいまで点々と静止しているもの、さらに飛んで来て幹の近くを舞っているものや止るのが見られた。

午前中に多く見たように感じられたが、午後は特に注意しなかったことと、天気が多少悪くなったためかもしれない。雌雄はほぼ同数見られた。

(神奈川県逗子市、露木繁雄)

○シラハタモリヒラタゴミムシ神奈川県に産す

シラハタモリヒラタゴミムシ *Agonum* (*Scotagonum*) *shirahatai* HABU, 1954 は、山形県月山における 故白畑孝太郎氏の採集品によって記載された種である。上記模式産地のほかでは、青森県大木平、十和田、山形県飯豊山、新潟県金丸、黒川、大阪府金剛山に記録があるが (HABU, 1978), 少ない種のようなのである。

筆者は、木下富夫氏にご恵与いただいた神奈川県産の標本を所有しているので報告しておく。

1♂, 神奈川県伊勢原市大山, 13. v. 1978, 木下富夫採集。

末尾ながら貴重な標本をご恵与くださった木下富夫氏、本種を同定してくださった笠原須磨生氏に厚くお礼申し上げる。(神奈川県川崎市、田尾美野留)

○ハマベオオハネカクシ *Hadropinus fossor*

SHARP を本州から記録

多少古い標本ではあるが、上記の種を本州で得ているので記録しておきたい。

青森県下北郡東通村小田野沢, 1頭 5. viii. 1954; 1頭, 6. viii. 1954; 5頭, 4. viii. 1969。

このハネカクシは最新の図鑑 (原色日本甲虫図鑑 II, 保育社) でも産地として、北海道、利尻島、サハリンが挙げられているだけで、本州以南からは知られていなかった。(青森県弘前市、松野武敏)

昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!!

1, 2, 3, 4, 5号 (各号 100 本 180 円)

なお、有頭針 00, 0号もできました。その他、採集、標本整理用各種器具も取揃えてあります。

〒150 東京都渋谷区渋谷 1丁目 7-6

電話 (03) 409-6401 (ムシは一ばん)

振替 東京 21129

志賀昆虫普及社

○ノグチアオゴミムシの属名について

ノグチアオゴミムシはこれまで亜属不明のまま *Chlaenius* 属として扱われてきた。

筆者は、原色日本甲虫図鑑 II, 保育社 (1985) で本種を解説するにあたって、LUTSHNIK, 1933 による旧北区産 *Chlaenius* 属の亜属の検索表* に基づき属名を *Hemichlaenius* としたが (pp. 159, 459, 474), 実はこの名が BATES, 1892 に先取されていて、KRYZHANOVSKIY が 1976 年に公表したソ連極東地区に産するアオゴミムシ族の綜説** 中で *Lithochlaenius* と改名されていることが判明した。

これは文献の見落としによる筆者の大失策で、当然ノグチアオゴミムシの学名は次のように訂正しなくてはならない。

Lithochlaenius noguchii (BATES)

なお、KRYZHANOVSKIY は *noguchii* についても言及しているが、ウスリイから記載された本属の基準種 *rambouseki* (LUTSHNIK) は、*noguchii* と同様に石礫質の河岸や中洲を好んで生息するようで、属名もこれに因む。Litho, *lithos* = 石。

末尾ながら筆者の誤りを指摘し、文献を貸与してくださった上野俊一博士に厚くお礼申し上げる。

* LUTSHNIK, V., 1933. Synopsis subgenerum palaearcticorum generis *Chlaenius* BON. Čas. Čs. Spol. ent., 30 : 169—172.

** KRYZHANOVSKIY, O. L., 1976. Obzor zhuzhelits Tribu Callistini (Coleoptera, Carabidae) dalnego vostoka. Trudy biol. pochv. Inst., (n. s.), 43 (146) : 8—17. Vladivostok.

(千葉県船橋市、笠原須磨生)

今回は諸般の事情により増頁して合併号といたしましたが、次回からは従来どおり各号ごとの発行を予定していますのでご諒承願います (黒沢良彦)

甲虫談話会

会費 (一ヶ年) 2000 円, 次号は 6 月下旬発行予定

投稿〆切は 5 月 31 日

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動物研究部内

電話 (364) 2311, 振替東京 0-60664

印刷所 創文印刷工業株式会社

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥ 5,000, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥ 1,700, 送料一箱につき都内及第一地帯 : 3 個以下 ¥ 1,300, 4 個以上 ¥ 850 (以下同様)。第 2 地帯 ¥ 1,500, ¥ 950, 第 3 地帯 ¥ 1,700, ¥ 1,050, 其他, 各種器具, 針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。(¥ 60)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-212-25

電話 (03) 811-4547, 振替 6-113479